

表 2 抗生剤耐性パターン

S. mitis (n=13)	
TC	1
CP	1
TC, OL, LCM, 60-S	3
TC, EM, OL, LCM, 60-S	1
TC, EM, OL, LCM, JM, 60-S	1
	1
S. MG-intermedius (n=11)	
TC	1
TC, OL	1
TC, EM, OL, LCM, JM, 60-S	2
S. anginosus (n=6)	
TC	1
S. sanguis II (n=5)	
TC	3
S. morbillorum (n=2)	
TC	1
S. sanguis I (n=1)	
TC	1
U.C. (n=11)	
TC	3
60-S	1
TC, OL, LCM, 60-S	2
TC, EM, OL, LCM, 60-S	3

*tetracycline
 chloramphenicol
 oleandomycin
 erythromycin
 josamycin
 6059-S
 lincomycin

ば全例から検出されたが、A群溶連菌は直接、増菌とも不検出であった。

ビリダンス分離株の菌種別薬剤感受性測定結果は表2のようで、TC耐性がすべての菌種に認められたほか、S. mitis では CP 単独および4~6剤の多剤耐性が、S. MG-intermedius と u.c. (種別不能株) でも多剤耐性が認められ、A群レンサ球菌と類似した成績であった。しかし、PC, ABPC および CER では MIC 25 µg/ml 以上の株は検出されなかったが、A群菌とは異って PC 0.5 µg/ml 以上の株が S. mitis で約67%に達し、ABPC 12.5 µg/ml の株も S. mitis その他2・3の菌株のみみられ、βラクタム抗生剤に対する感受性低下の傾向が認められた。

動物実験では、5菌種を用いてマウスを攻撃したところ、S. sanguis I の生菌によってのみ、両系統のマウスとも、肺血管の著明な浮腫と内壁の肥厚が認められた。

以上、今回の調査では、MCLS 患者の咽頭材料から、抗生剤使用の有無に関係なく全例から Viridans streptococcus が検出された以外、インフルエンザ菌を除いて、とくに病原と考えられる菌は分離できなかった。しかし、心内膜炎や敗血症などの原因となるが、一般には病原菌としてあまり考慮されないビリダンスについて検討した結果、マウス接種や薬剤感受性測定によって新しい知見がえられ、このような菌でも患者例の免疫の“みだれ”との相乗作用によって、何らかの病原性を発揮する可能性のあることが示唆され、新しいアプローチが必要と考えられた。

川崎病児の抗スタフィロリジン値について

東京女子医大小児科 草 川 三 治
 浅 井 利 夫

〔目的〕

今日、川崎病の研究で残された最大の問題は原因である。私共も、昨年度の原因究明の一助として川崎病罹病児とその両親の咽頭細菌について検討した。その結果、年少例の病初期にブドウ球菌が検出される例のあること

に気付いた。そこで、ブドウ球菌が本症の発症に関与するかどうか検討する目的で、最近開発されたブドウ球菌感染を血清学的に診断するのに用いられる抗スタフィロリジン値を測定した。

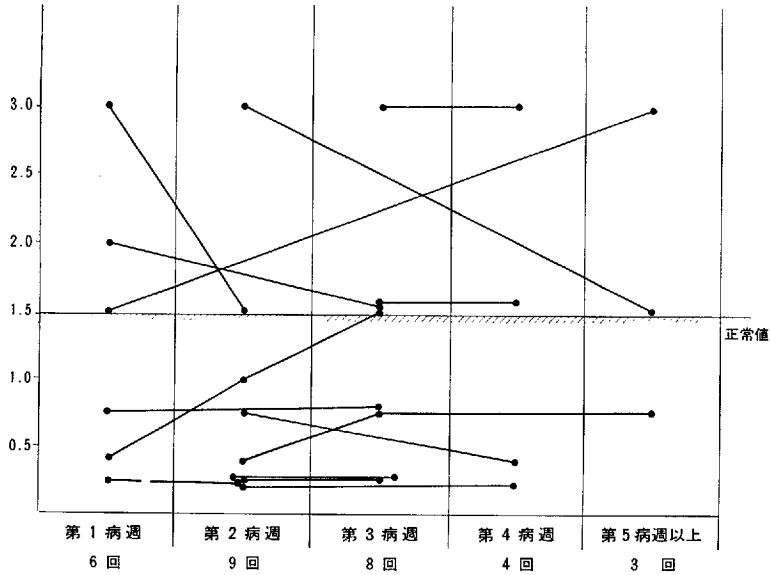


図1 病週別抗スタフィロリジン値

〔対象および方法〕

対象は、当院小児科に入院した川崎病児、14例で、年齢分布は1才以下が4例、1才代が2例、2才代が3例、3才代が1例、5才代が2例、6才以上が2例であった。測定病週は第1病週が6例、第2病週が9例、第3病週が8例、第4病週が4例、第5病週以後が3例の延べ30回であった。測定方法は、ヘキスト社製抗スタフィロリジン測定用キットを用いた。

〔結果および考察〕

測定した抗スタフィロリジン値の結果は図に示したと

おり、14例中7例（50％）が正常値、1.5以上の値を示した。

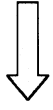
今回の抗スタフィロリジン値の結果からは本症の発症にブドウ球菌が関与しているとは断定し得なかったが、50％もの児が高値を示したことは興味ある所見である。さらに、本症の発症に細菌なり、ウイルスなりの関与を思わせる臨床症状、所見、疫学的所見が数多くある。今後も原因究明の努力がなされ、一日も早く原因が解明されることを望む次第である。

川崎病モデルとしての実験的冠状動脈炎 における経時的変化について

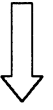
東邦大学付属大橋病院病理部 直 江 史 郎
跡 部 俊 彦
東邦大学公衆衛生学教室 村 田 久 雄
昭和大学第一病理学教室 増 田 弘 毅

川崎病の病因についてはリケッチャ、溶連菌その他諸説が唱えられているものの未だ不明な状態にある。

本症が報告されて既に14年になり、本症罹患の既往を有する児童が次第に思春期から成人を迎える時期に来て



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔目的〕

今日,川崎病の研究で残された最大の問題は原因である。私共も,昨年度の原因究明の一助として川崎病罹病児とその両親の咽頭細菌について検討した。その結果,年少例の病初期にブドウ球菌が検出される例のあることに気付いた。そこで,ブドウ球菌が本症の発症に関与するかどうか検討する目的で,最近開発されたブドウ球菌感染を血清学的に診断するのに用いられる抗スタフィロリジン値を測定した。